The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国際遠隔交流学習による日本語会話授業 ： 「超鏡」を用いた中日の大学間の実践をもとに
Author(s)	李, 哲; 孫, 帙; 奥林, 泰一郎 他
Citation	大阪大学教育学年報. 2015, 20, p. 63-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国際遠隔交流学習による日本語会話授業
—「超鏡」を用いた中日の大学間の実践をもとに—

李　哲　孫　帙　奥林泰一郎　中村雅子　前迫孝憲

【要旨】

本研究では、中国で日本語を学ぶ中国人学習者を対象に、日本語母語話者の協力を得て「超鏡」システムを用いた国際遠隔交流学習の環境を構築し、日本語会話授業を支援する方法について実践授業を行い、その効果を検討した。まず、中国人学習者は学習支援システムで学習内容として扱う敬語とその関係図を作成させた。次に、「超鏡」を用いた国際遠隔交流環境において、日本語母語話者の協力を得て関係図の発表と会話文の作成を行った。その結果、日本語母語話者との会話授業は、同じ空間を共有しているように感じられるという特徴を持つ対面型の「超鏡」システムの使用を通して、中国人学習者の学習意欲を高めることが確かめられた。また、関係図と会話文の作成を通して日本語敬語に関する理解が進むことが示唆された一方、学習支援システムの操作の簡略化、会話授業の時間のとりかた、会話内容の難易度の設定などの問題点があげられた。

1. はじめに

中国の大学における日本語教育は、日本語の文法や用法、語彙などを駆使して正しい文を作り出す言語能力だけではなく、その言語の背景にある異文化を理解するコミュニケーション能力を育てることが目的とされている。しかし、実際の教育現場において、こうしたコミュニケーション能力を向上させる学習環境が備わっているとは言いがたい。独立行政法人国際交流基金の2013年度「海外日本語教育機関調査」では、近年マルチメディア教材の使用が徐々に増えてはいるが、教育の現場では設備の不足、教員の情報機器活用能力の不足が原因でICTを使うところはまだまだ少ないと指摘されている。

また、中国の日本語教育では、日本語文法を中心にした基礎科目は過半の授業時間を占め、「読む」と「書く」を重視し「聞く」と「話す」を軽視する傾向があり、教材や教授法の不足で「学ぶ」と「使う」の間にギャップが生まれている。そのため、基礎科目で文型や語彙を学んだが会話に使えない学習者が少なくない。多くの大学は、日本語母語話者である教員の人数が足りないため日本語会話授業も中国人教員が担当する、学習者人数が多いため一斉授業で教える、会話の学習時間が少ないなどといった問題に直面している。

これらの問題に対して、日本人協力者を日本語教育の現場に参加させたり、遠隔通信システムやソーシャルネットワーキングサービスなどを使ったりする方法が多く取り入れられている。しかし、日本語会話授業を支援する事例はまだ少なく、国際遠隔交流のための学習環境をいかに構築するか、また、それを用いることが学習にどのような効果を与えるか検証することが日本語教育における大きな課題となっている。そこで、本研究では、中国で日本語を学ぶ学習者を対象に、日本語母語話者の協力を得て「超鏡」システムを用いた国際遠隔交流学習の環境を構築し、日本語会話授業を支援する方法を考案する。

2. 国際遠隔交流学習環境の構築

本章では、「超鏡」システムを用いて中国人学習者と日本語母語話者と国際遠隔交流を行うために構築した学習環境について紹介する。国際遠隔交流のための学習環境として「超鏡」システムを構築し、会話授業を支援した。また、基礎科目で学習した知識を活用して会話の練習を円滑に進めるために学習支援システムを導入した。

2.1.「超鏡」システム

「超鏡」(HyperMirror) は、左右反転させた自己像と、遠隔地の相手像とを同一画面上に重畳表示することで、まるで同じ空間にいるかのように対話できる遠隔視覚対話システムである (Morikawa & Maesako 1998)。自分と相手の姿が映された画面を見て対話するため対話者と同室感や一体感を持ちやすく、指さしやジェスチャーなどの非言語情報の伝達が可能である。そのため、テレビ会議システムより遠隔のコミュニケーションが容易な新しい学習環境として、国際間交流学習や遠隔による技術研修など数多くの教育実践が行われ、学習理解の向上などの効果が得られた (重田　2006)。超鏡システムは図１に示したように、遠隔地からの相手像と左右反転した自己像を合成することにより、対話仲間が同一空間に存在する環境を提供することができる。

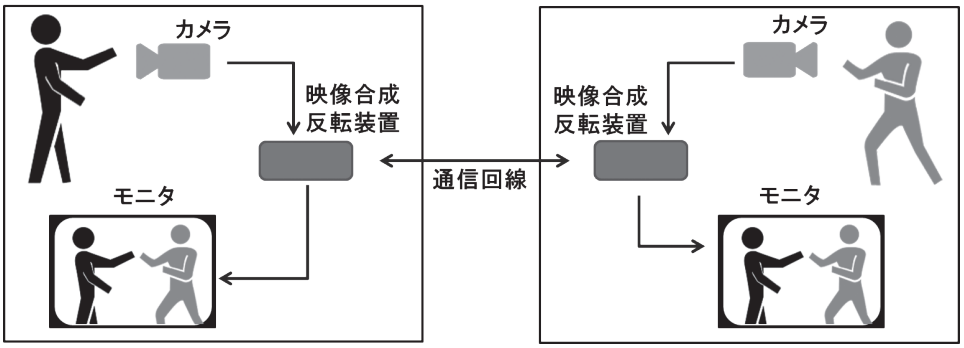

図１　超鏡システム概念図 (重田　2009)

本研究では中国のある大学の日本語専攻必修科目「日本語会話」を支援するために、「超鏡」システムを利用して日本のある大学とつながり、高速通信回線を介した国際遠隔交流学習の環境を作った。具体的には、図２に示したように、中国側と日本側において、ビデオ会議システムPanasonic HD映像コミュニケーションユニット (１式)、ATEMスイッチャー (１～２台)、カメラ (１～２台)、プロジェクタ (１台)、モニタ (１台)、PC (２台)、及び映像反転器、コンバータ、スピーカ、マイク (複数) をそれぞれ配置した。図３に示した中国側の会場では、「超鏡」システムの舞台において参加者が最大８名であり、見学者が30名程度であるため、見学者用のプロジェクタと参加者のモニタを交差90度にし、参加者４名 (日中各２名) を１グループにして交替制で実験を行った。このシステムを使用することで、中国人学習者が１対１の対面交流の形で日本語母語話者とコミュニケーションすることができる。

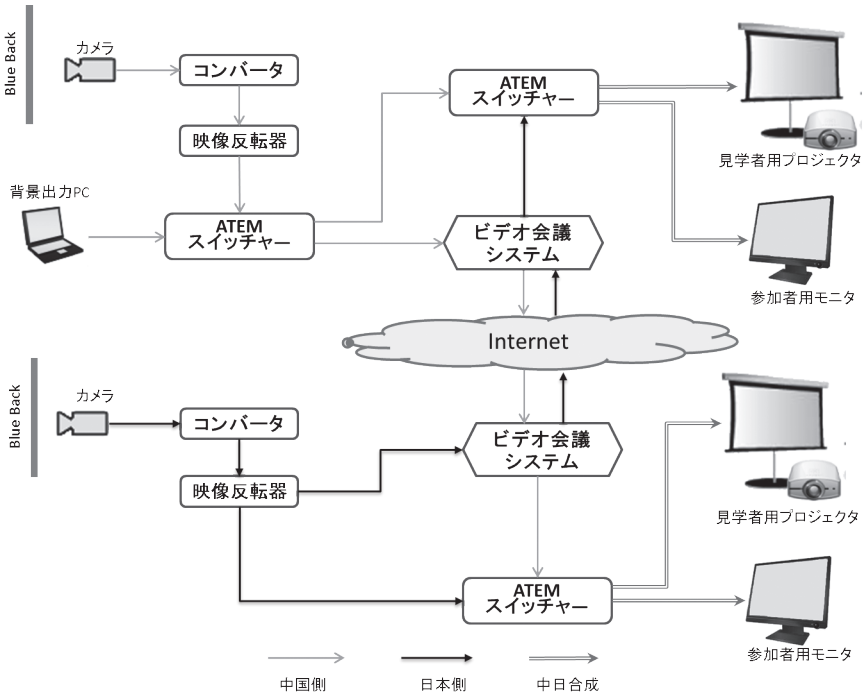

図２　超鏡システムの構成図

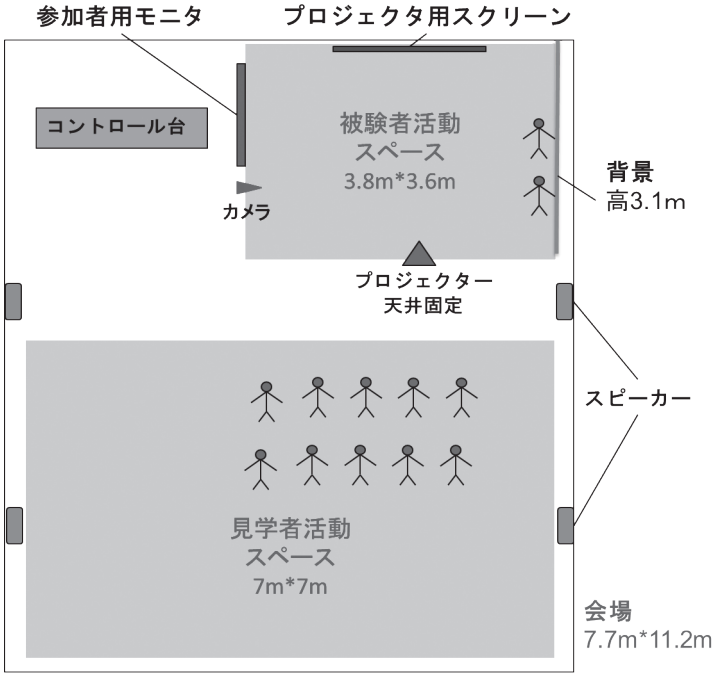

図３　中国側の会場配置図

2.2. 日本語学習支援システム

中国の大学における日本語教育では、中国人教員が日本語の文法を中心とした基礎知識、日本人教員がコミュニケーションや会話実践を重視する傾向がある。また、課題として、日本語の教員に関する問題として教授能力、日本語の能力、教授法情報の不足が挙げられている（山田　2011）。本研究の実験先としての中国のある大学では、「日本語会話」という科目は時間数が少なく、文法や語彙の理解を中心とする「総合日本語」、「日本語文法」などの基礎科目の補助として位置づけられている。しかし、「総合日本語」、「日本語文法」などの主要科目に学んだ知識を会話の中に正しく活用することはそう簡単ではないため、学習した内容と現実場面での運用とのギャップを埋めるための授業法が必要であると考えられる。そこで、本研究では基礎科目で学習した知識を活用して会話の練習をうまく進めるために、日本語学習支援システムを導入した。

このシステムはPHP5.2とFlash CS5.5（Action Script3.0）で開発し、WebサーバとしてApache2.2、データベースサーバとしてMySQL5.0を利用している。中国語と日本語の漢字の文字化けを避けるため、全システムのコーディング及びデータベースではUTF-8を使用した。システムの機能としては項目の編集・比較・管理、項目の検索やランキング、関係図の編集・表示、コメント、ユーザー管理などを有する。

本システムでは基礎知識としての内容（文型、語彙、漢字、専門用語など）を教科書や参考書から抽出した後、wikiの仕組みを利用してそれぞれ「項目」化する。１つの項目は記述内容、項目間の関係図、及びそれらに関する情報からなっている。項目名は文型、語彙、漢字、専門用語とし、品詞と難易度により分類される。記述内容は表記、品詞、活用、接続、意味と例文、参考などを含めており、関係図はノード（項目名）、リンク（ノード間の線）、リンクワード（上位ノードとの関係）からなっており、各項目の記述内容に即して作成される。

システムのホームページ（図４）における分類図や検索を通して項目名をキーワードとして調べることができる。また、項目名をクリックすると、項目の表示画面（図５）が表示される。項目の表示画面には、項目名、分類、難易度をナビとして画面のトップに、関係図を左側の上部に、記述内容とコメントを左側の下部に表示し、作成者、訂正者、日時、回覧回数、バージョン番号などを右側に表示する。

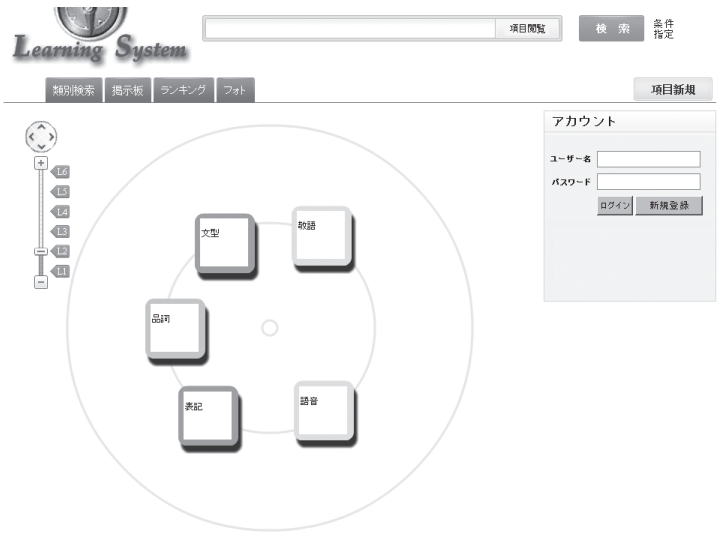

図４　ホームページ（一部）

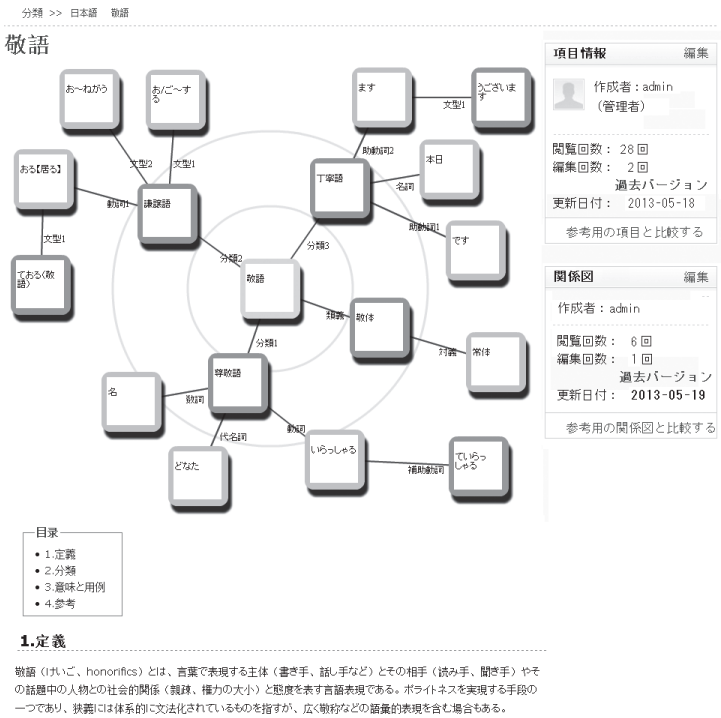

図５　項目の表示画面（一部）

システムの利用方法としては、学習予定の内容がシステムにある場合、利用者がログイン後、学習予定の内容を分類図や検索で探し出し、提示された内容を学習し、それを参考にして関係図や記述内容を新規作成し編集する。当該内容がない場合、項目を新規作成して記述内容を入力し、関係図を自分なりに作成する。授業内外でも随時にシステムにアクセスし、項目の記述内容と関係図を閲覧・編集したり、コメント欄を利用して意見交換したりすることができる。また、「超鏡」による国際遠隔交流学習では、学習者は「超鏡」による国際遠隔学習時用のプレゼンテーションファイルを事前に作成する必要はなく、発表時に本システムで作成した記述内容と関係図を合成画像の背景として手差しで相手に説明することができる。

3. 実践授業の実施

3.1. 日本語会話授業の概要

本研究の実践授業は中国の大学の日本語専攻を対象に行われたため、ここで中国の大学日本語学科のカリキュラムにおける「日本語会話」という科目の位置づけを述べる。中国の大学における日本語専攻（大学生用）の指導要領として、中国教育部により定められた『高等院校日語専業基礎階段教学大綱』と『高等院校日語専業高年級階段教学大綱』がある。この２つの大綱に基づき、日本語専攻のカリキュラムでは、主に「精読」、「技能別日本語」が設けられている。

「精読」とは文法や語彙などの基礎知識を中心にして「聞く、話す、読む、書く」という四技能全てが扱われる必修科目であり、科目名は各大学により「基礎日本語」、「総合日本語」などと名付けられている。そ

れに対して、技能別日本語とは「聞く、話す、読む、書く」を科目別で教授し、基礎知識の活用能力を育てる必修選択科目であり、科目名は「日本語会話」、「日本語文法」、「日本語読解」等がある。実践先の大学では、精読である「総合日本語」が週８時間以上で学習時間の多くを占め、技能別日本語である「日本語会話」は週２～４時間で精読の進捗に合わせて授業内容を設置している。「日本語会話」は日本人教員と中国語教員が交替で担当するが、日本人教員は中国語ができないため、全部日本語で授業を行う。また、「日本語会話」を履修する学生は50人以上いるが、日本人教員が足りないため一斉授業の形で行われている。

3.2. 実践授業の流れ

本研究では、「超鏡」を用いた国際遠隔交流授業において、中国人日本語学習者が日本語母語話者とのコミュニケーションを図り、日本語の学習方法として関係図の活用による発表や会話づくりを行うことの可能性と効果を考察する。具体的には、中国のある大学の日本語専攻３年生６名を対象として2013年５月20日～31日「日本語会話」という科目の授業時間に実践授業３回（計６時間）を行った。実験対象は、全員が中国語を母語とし、日本語を２年間（合計600時間以上）学習しており、日本能力上級に達したレベルであった。国際遠隔授業を順調に進めるために、日本のある大学の人間科学専攻の日本人大学生６名、教師１名とファシリテーター２名を配置した。日本人大学生６名と中国人学習者６名を３グループ（１グループは日本人２名と中国人２名）に分け、１グループ当たり２時間ずつ、順番に実践授業を受けた。教授者１名は中国側で授業の内容、知識地図の判定や説明などの役割を担うが、ファシリテーターはICT支援員として中国側と日本側に１名ずつで「超鏡」システムと学習支援システムの操作を行う。

実践授業の内容は、敬語の理解とビジネス会話における活用をテーマとして、「新日本語会話･商務編」（中国・外語教学与研究出版社）を参考書にし、敬語を使ってビジネス日本語の会話を練習するものであった。実践授業の前に、事前学習として学習者に学習支援システムにおいて敬語についての内容を学習し、項目と関係図を新規に作成させた。

表１　実践授業の流れ

	内　容	時間割り
1	教師により授業の概要と流れを説明する	５分
2	自己紹介	10分
3	敬語についてそれぞれ関係図を作成し、発表する	25分
4	教師によりビジネス会話の要点を説明し、課題を与える	10分
5	提示された会話文に従い、残りの会話をグループで話し合う。各自が担当する部分を出来上がった後、会話を行う	30分
6	感想や不足をまとめ、関係図を再検討し修正する	30分
7	質疑など	５分
8	事後アンケート	５分
	合　計	120分

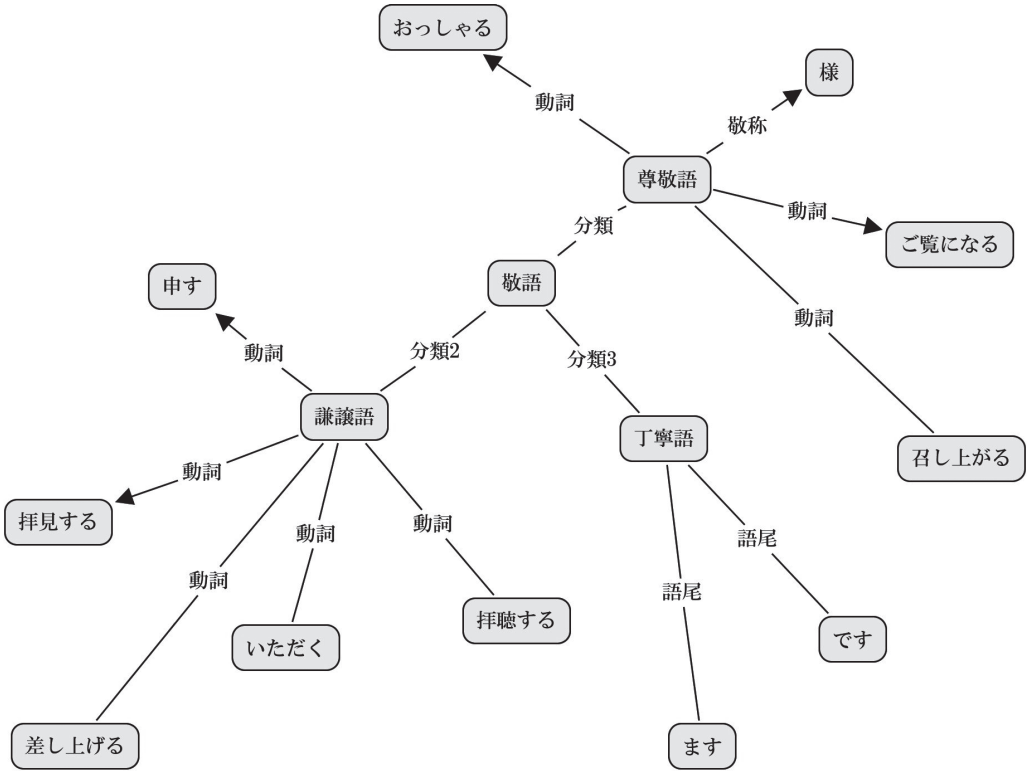

図６　参加者が作成した関係図の例

表２　会話文の例

場　面	登場人物と役割	提示文
場所：A社のロビーと会議室 概要：B社の社員は発注の部品が納期に間に合わなかったことを解決するため、A会社に訪問したが、A社の社長が不在で営業部の部長と社員がそのかわりに説明する。	A社受付係（案内、質問対応） A社営業部部長（謝り、契約継続の交渉） A会社営業部社員（現地担当として事情説明） B会社の社員（代表として社長の意思を伝え、契約解除、賠償等を要求）	A社受付係：いらっしゃいませ。 B社社員：お世話になっております。私は_____と申します、社長にお目にかかりたいんですが、いらっしゃいますか。 A社受付係：お約束を_____。 B社社員：はい、_____。 A社受付係：かしこまりました、少々待ちくださいます。_____でいらっしゃいますね。_____までご案内いたします。 B社社員：社長は_____。
場所：A社の会議室 概要：消費者はB社の製品で怪我をした。B社の製品の技術欠陥が原因だとA社が判明した。消費者の代表としての田中さんとB社営業部部長はA社と交渉し、A社開発部が謝罪、解決策を立てる。	A社開発部部長（責任者として謝り、賠償交渉） A社技術担当（事情説明、解決案を提案） B社営業部部長（一部の責任をもって自社の損失を最小限に抑える） 消費者田中さん（代表として消費者の意思を伝え、両社に賠償、謝罪等を要求）	A社技術担当、開発部部長：（謝り） A社開発部部長：私の監督不行き届きでご迷惑を_____。今後_____。 A社技術担当：大至急部品の設計を修正させていただきます。現時点では_____。田中：すごくひどいな。入院した人の代わりに_____要求を伝え_____。 B社営業部部長：弊社も_____。 田中：A社として_____。

実践授業の流れを表１に示す。まず、教師が今回の授業の概要と流れを簡単にグループ４名に説明した。次に、「超鏡」を用いて同室感のある合成映像を作るため、参加者４名に適当に一列に並んでもらい、画面上での中国側と日本側の参加者の大きさが合うように映像を調整した。その後、アイスブレイクのために立ち位置の左側から順番に自己紹介を行った。次に、敬語について各自の理解で文法用語、語彙、文型などを使って作成した関係図をそれぞれ発表した。中日両方の関係図の画像ファイルのフォーマットを統一するため、ここではWinCmapToolsを使った。WinCmapToolsはノード、リンクなどを用いて断片的な情報を整理したり表現したりするための図形作成用のソフトウェアであり、簡単な操作で樹形図などの図形を作成することができる。参加者が関係図を自分なりに紙に書いたり学習支援システムで作ったりした後、ファシリテーターの手伝いで同じフォーマット（JPEG）のファイルに変換した。それらのファイルは発表時に合成映像の背景として拡大・表示された。合成背景として使った関係図の例は図６に示す。

発表の後、教師はビジネス会話において敬語を使用する際の要点を説明し、ビジネス会話文を作る課題を与えた。教師は会話の場面を設定し、会話前半の１～６文目を一部提示したが、会話の続きはグループ４名で役割分担を決めて話し合いながら作り、会話の練習を行った。授業時間が限られているため、１グループは２つの内容から１つだけ選んで完成させた。会話文を作る注意点は会社のマナーを守ること、紙やメモを見ないで作ることである。会話文の例は表２に示す。その内容は、ある会社において会社員や消費者などの４名が「納期の遅延」と「損害賠償」について交渉するものである。

最後に、グループ内で感想や不足をまとめて関係図を再検討して修正した。ファシリテーターは関係図を回収し、事後アンケートを回答してもらう。

4. 考察

実験授業の学習効果を評価するために、①項目と関係図の作成、②コミュニケーションの様子、③アンケートの結果についての検討を行った。

4.1. 項目と関係図の作成

実践授業では、中国人学習者が事前学習として日本語学習支援システムにおいて敬語についての知識を学習して自分なりに項目と関係図（事前関係図）を新規作成し、授業時に口頭発表した。日本語母語話者は会話授業の前に関係図（事前関係図）を作成した後、発表した。また、会話を行った後、グループ間で検討し、関係図（事後関係図）を再訂正した。そのため、１グループ４名に対して関係図８枚があり、３つのグループ計24枚があった。関係図の中心にあった敬語というノードを除いて、関係図24枚のノード数を集計した結果を表３にまとめた。

表３　ノード数と階層の集計

		グループ１	グループ２	グループ３	合　計
事前関係図	ノード	59	61	55	175
	階層	9	7	9	25
事後関係図	ノード	84	70	71	225
	階層	12	8	11	31

表３より各グループのノード数について事後関係図は事前関係図より多かった。事後より多くなったノードは会話で使った語彙や文型などであり、使う頻度が高いほど、事後関係図に現れる頻度が高いということが分かった。また、階層については、事後関係図も事前関係図より多く、階層構造が複雑になり、正確性が高まったことより、関連する知識の内容が広がったと考えられる。ノードと階層の増加は、会話文を作成することにより知識の理解と活用を促進する効果であると推測される。

階層には参加者が分類に対する考えを記す。中国人参加者６名全員が学習支援システムを参考にして第１層に記入したノードは、「尊敬語、謙譲語、丁寧語」という３つのみであった。一方で、日本人参加者が記入したノードは４～６であり、意味、目的、程度、品詞などに分類された。第２層における分類は、教科書に決まった分類法がないため、中国人学習者は品詞や文型、用例などに分類しており、統一の分類法に従って分類する傾向が見られなかった。これは、教科書によって扱われている敬語の３分類法が中国人学習者の思考に定着しているが、そこから更なる分類をする際の指標となるものが明確でないために敬語の使用をする際に混乱しやすく、誤用や誤解を起こす原因になっていると推測される。

中国人参加者と日本人参加者のノード数を別々に集計した結果を表４に示す。ノード数は中国人参加者が日本人参加者より全体的に少なかったが、事後関係図に増えた分は日本人参加者より多かった。事後関係図から見れば、中国人参加者は教科書に載せた内容だけでなく、会話に現れた語彙や文型、日本人の書いた内容をノードとして使用し、間違った分も修正した。ここから、日本人と直接に会話をすることは、授業の活性化と知識の定着に有効であると考えられる。

表４　中国人参加者と日本人参加者のノード数

		グループ１	グループ２	グループ３	合計
中国人参加者	事前関係図	28	26	23	77
	事後関係図	40	32	34	106
日本人参加者	事前関係図	31	35	32	98
	事後関係図	44	38	37	119

会話授業が終わった後、教師が関係図と記述内容の正誤判定を行った。その結果を表５に示す。表５において、ノードの書き間違い、上位のノードとのリンク及びリンクワードの間違い、記述内容の間違いなどがあれば、そのノードを間違ったノードとした。間違い率は各グループとも事後関係図が全体的に事前関係図より低くなった。間違いの内容としては、事前関係図では分類の間違い、リンクワードの間違い、品詞の間違い、作成による誤操作などで、事後関係図では主に例の間違いであった。会話文の作成を通して分類や品詞の間違いが減ったという結果から、敬語についての理解が深まったと推測される。また、中国人参加者と日本人参加者の間違い率の差は大きくないが、間違いの内容は異なっている。日本人参加者はノード数が中国人参加者より多いが、必ずしも日本語の学校文法に準じておらず、リンクワード、用例などがかなり自由でバラバラであったため、間違い率が高い。例えば、所属や程度などの分類を混用する、動詞と助動詞の例を混ぜるといった例がみられた。一方、中国人参加者は、分類やリンクワードの間違いが相対的に少ないが、品詞や例の間違いが日本人より多かった。特に、学習支援システムに書いた関係図に関する記述内容では、「ございます」を「尊敬語」の下位に置いたり、単語の例と文型の例を混ぜたり、活用法の説明を間違えたりした。そのような間違いから見られるように、基礎知識への理解が不十分であることが分かった。これらのことから、日本語母語話者は、使用の正誤が分かっているが日本語に関する専門知識がないため、外国人に体

系的な文法や語彙を説明する時に限界がある一方、中国人学習者は、体系的な文法や語彙を学習しているが、使用時の正誤を判定しにくいと考えられる。

表５　正誤のノード数

		正しいノード数	間違ったノード数	間違い率
事前関係図	中国人	50	27	35.06%
	日本人	60	38	38.78%
事後関係図	中国人	99	7	6.60%
	日本人	110	9	7.56%

4.2. コミュニケーションの様子

「超鏡」システムによる国際遠隔交流学習の環境では、中国人学習者は日本人母語話者と同じ映像を見ながら、ビジネス場面での会話文を作成する共同作業を行い、いろいろなコミュニケーションをとった。会話文作成時に行ったコミュニケーションの様子を分析するために、各グループでの会話について、会話文の作成をめぐる「課題作成検討」と「課題内容外」の話題という２つのパターンに分けてその回数を表６に集計した。更に、「課題作成検討」に関しては、「内容提起」、「相槌表現」、「修正・回答」という３つの下位分類を設けた。「内容提起」は会話文をめぐる新しい内容や新しい単語を取り出したり、質問や確認をしたりするものである。「相槌」は相手の話へ「うん、ええ、えっ、などほど、すごい」などを返事する内容で、話し手が発話権を保持する状態で聞き手が相手の話を聞いていることを示すシグナルである。「修正・回答」は相手の話を修正したり質問を答えたりする内容で、聞き手が自分の意見を主動的に出す態度を示すものである。

表６より、各グループでは、作成した会話文の文数（平均37.33文）に対して１文当たり14.89回の検討がなされた。「内容提起」は会話文の作成を進めていく作業としてほとんどの会話文がここから生み出された。「内容提起」の内容に対して、「相槌表現」と「修正・回答」の回数は平均2.09回であった。これらのことより、一つの会話文に対して複数回のやり取りが積極的に行われたと推測される。また、課題内容外の話し合いも26.55％を占めており、会話文以外にも幅広い話題について話し合っていたことが分かった。

表６　種別で集計した回数

	課題作成検討			課題内容外	小　計
	内容提起	相槌表現	修正・回答		
グループ１	78	47	82	57	264
グループ２	35	60	67	74	236
グループ３	67	50	70	70	257
合　計	180	157	219	201	757

「内容提起」はグループ２がほかのグループより明らかに少なく、全体的な会話の回数も少なかった。そのうえ、関係図のノード数もほかのグループより少なかった。その理由については、グループ２が選んだ話題は表２の「納期交渉」に関する話題、グループ１とグループ３が選んだのは「消費者との賠償交渉」に関するものであり、「納期交渉」に関する話題の難しさは「消費者との賠償交渉」より低かったと考えられる

ためである。これにより、難易度を高めに設ける会話の課題は、習得した知識を活用する学習活動を促進する可能性があると示唆される。

また、中国人参加者と日本人参加者の会話内容を種別で集計した結果を図７に示す。中国人参加者の「内容提起」の割合は日本人参加者より12.5％多かったのに対して、日本人参加者の「修正・回答」の割合は中国人参加者より22.44％多かった。この結果から、中国人参加者は新しい文を作ったり質問したりして会話文作成を進める学習意欲を持っていたのに対し、日本人参加者は中国人が言った内容を修正したり、質問を回答したりするアシスタントの役割を果たしていたと考えられる。課題内容外については、中国人参加者の割合は日本人参加者よりやや多かった。会話文以外の内容にも興味を持って積極的に日本人参加者に聞いている傾向が見られる。

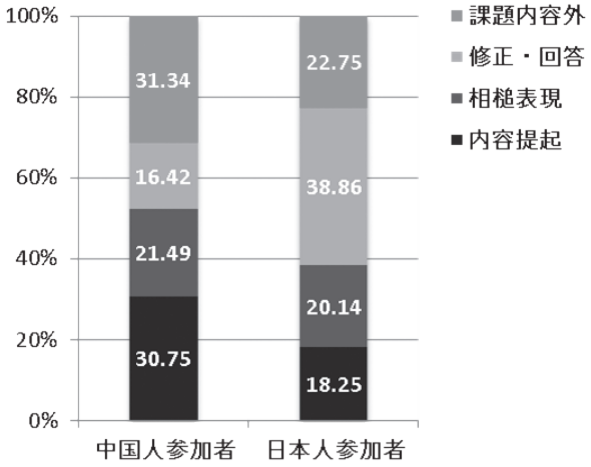

図７　中国人参加者と日本人参加者の種別の回数比例

更に、会話内容の間違いについては、１文当たりの間違いを計算すると、中国人参加者は文法の間違い0.87回、語彙の間違い0.98回、センテンスの意味の間違い0.37回となり、日本人参加者は１名当たり、それぞれわずか0.05回、0.08回、0.13回となった。中国人参加者は文法や語彙の知識をもっていても１文当たり１回以上間違いを犯す傾向が見られる。中国人参加者は質問や確認をすることが多かったが、日本人参加者はそれらに対して明確な否定や確認をせずに曖昧に話していた。そうした中で、日本人参加者が中国人参加者の発話によって誤解し、センテンスの意味を間違えたり、中国人参加者が使った文型や語彙をそのままで自分の話に使ったりした例がみられた。特に、中国人参加者は尊敬語についての質問の回数と間違いが謙譲語や丁寧語より高く、文型の使用頻度が語彙より高いがその間違いも高く、会話文の意味に相応しくない初級レベルの簡単な語彙を無理矢理に使ってしまう傾向が見られた。こうした様子から、会話の中で中国人学習者に対して、尊敬語の練習を重ねて、文型だけでなく、語彙の使用を重視すべきであると示唆される。

最後に行ったグループ全員で感想や不足をまとめて関係図を再検討し修正する作業の中では、中国人参加者は日本人参加者とのコミュニケーションから新しい語彙や新しい使い方をたくさん学んで、それらの知識を自分の関係図に追加した。一方、日本人参加者は、母語であっても外国人に向けて説明するには難しいところがあると理解し、敬語の分類方法を統一して関係図を整理した。このような対面交流では、日本語母語話者の協力を得て日本語学習者の問題解決や知識習得を支援することが有効と考えられる。

4.3. アンケート

実践授業の前に中国人学習者に記入してもらった事前アンケートでは、日本語能力のレベル、「聞く、話す、読む、書く」の学習意欲と学習方法、問題解決の方法などを聞いた。その結果、中国人参加者は全員日本語能力レベルが中級で、「聞く」と「話す」の能力を高めたいと答える人がそれぞれ４名と２名で、「聞く」と「話す」に自信があると答える人が０名であった。難しい内容については、敬語の使用、文法、口語への活用、適切な通訳、アクセントなどと答えた。学習方法については、「聞く」が学習時間の半分以上を占める人が多く、主に日本語のドラマや番組の鑑賞、教材の会話での練習などを通して「聞く」の能力を育てている。問題解決の方法については、教員に聞く、ネットで検索エンジンやSNSを活用する、辞書を調べると答えた。これらの回答から、中国人参加者は「聞く」と「話す」能力を高める意欲が強いと同時に使用時の難しさを理解しており、時間をかけて練習を重ねているが、「話す」に関する学習方法や学習機会が少ないと考えられる。このアンケート結果から、「話す」を重視する会話授業を活用するなどして日本語母語話者の協力を得て話す時間を増やす手法を考案し、その実現の可能性と学習効果を検証する必要があることが示唆されており、本研究の意義もそこにあるといえる。

実践授業が終わった時に回収した事後アンケートでは、コミュニケーションの留意点、敬語への意識、関係図の使用、国際遠隔交流環境について「大変そう思う（５点)、ややそう思う（４点)、どちらともいえない（３点)、ややそう思わない（２点)、全然そう思わない（１点)」という５段階評価で中国人参加者に聞いた。コミュニケーションの留意点については、平均値が高い項目は、「相手の目や表情を見て話す」が4.5点、「気持ちを伝えるように話す」が4.5点、「身振り手振りを交えて話す」が4.33点、「相手が知らないような言葉を使わないようにする」が4.17点、「相手に不快感を与えないようにする」が4.0点であることより、相手の様子を見て思いやりの心を持ってコミュニケーションを取る態度をとっていたことが分かった。平均値が低い項目は、「主動的に話しかけたくない」が2.83点、「話題を選ぶのがいやだ」が2.5点、「言葉が通じない場合コミュニケーションを諦める」が1.5点であることより、コミュニケーションを取るために主動的に話すという強い意欲が見られた。

敬語への意識については、「敬語をもっと練習すべき」が5.0点、「敬語についてまとめたら使いやすくなる」が4.67点、「敬語は難しい」が4.50点、「敬語を説明することが簡単だ」が2.17点、「わざわざ敬語を勉強する必要がない」が1.00点という順となった。これにより、学習者は、敬語の難度が高いため敬語に関する知識の整理と練習の必要性を認めていることが分かった。

関係図の使用については、「知識の関連で勉強しやすい」が4.67点、「関係図で知識を整理しやすくなる」が4.33点、「関係図で相手に説明することで自分も詳しくなる」が4.33点という高い平均値を示したことから、関係図の活用は学習に有効であると学習者が認めていることが分かった。ただし、学習支援システムやWinCmapToolsを用いて関係図を作成する操作の使いやすさ、適切さの平均値がそれぞれ4.17点と3.83点でやや低く、今後システムの操作を改善する必要があることを示唆している。

国際遠隔交流環境については、「同室感は面白かった」で5.0点、「超鏡での交流はよい経験になった」で5.0点、「また参加したい」で5.0点、「超鏡で楽しかった」で4.83点など、「超鏡」の使用を評価する複数の項目で高い平均値が得られた。また、「会話文作成時よく頑張った」で5.0点、「日本人の話をじっくり聞き、理解しようとした」で4.83点、「話し合いで新しく気づいたことがある」で4.5点、「会話のやり取りに積極的に参加した」で4.17点となるなど、国際交流による会話文作成を評価する複数の項目の平均値が高かった。これらのことより、国際交流による会話文の作成と「超鏡」の使用を通して学習意欲が向上したと考えられる。

事後アンケートの最後に設けられた自由記述では、「一番印象強いところ」については、遠隔で直接に日

本人と話す、敬語使用の注意点、文化の相違、関係図で書き直した間違いなどが取り上げられた。「意見や感想」については、「国際交流で面白かった」、「超鏡という形式で授業をするのが最高だ」、「いろいろ勉強になった」といった良い印象としてのコメントが書かれたが、「映像の幅に制限があってちょっと違和感がある」、「時間のコントロールが必要だ」、「相手の声が小さい」、「思わず自分側のパートナーと中国語で討論し始めてしまう」、「両側ともピンとこないとき全員が急に黙ってしまう」など、いくつかの問題点があった。

5. まとめ

本研究では、日本語学習支援システムを利用して学習および関係図を作成し、「超鏡」を用いた国際遠隔交流環境において、日本語母語話者の協力を得て関係図の発表と会話文の作成を通して中国人学習者の会話練習を支援する方法について検討した。とりわけ、その学習効果を検証するために、国際交流による会話の実践授業を行った。その結果、日本語母語話者との会話授業では、同室感を持つ対面型の「超鏡」システムの使用を通して学習意欲が高められることが確かめられた。また、関係図と会話文の作成を通して日本語敬語に関する理解が進むことが示唆された一方、学習支援システムの操作の簡略化、会話授業の時間のとりかた、会話内容の難易度の設定などの問題点があげられた。今後は、システム機能の改善、より良い持続可能な国際交流環境の構築と検証を行いたい。

【引用文献】

国際交流基金　2013 『海外の日本語教育の現状—2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版.
目黒真実・細谷優　2007 『新日本語会話・商務編』外語教学与研究出版社.
Morikawa,O. and Maesako,T. 1998 “HyperMirror: Toward Pleasant-to-use Video Mediated Communication System”, CSCW’98, pp.149-158.
重田勝介・中澤明子・松河秀哉・奥林泰一郎・三原勉・船田武志・大澤政寛・前迫孝憲・森川治　2006 「「超鏡」における映像遅延の影響」『ヒューマンインタフェース学会論文誌』 8（4）, 509-514頁.
中国教育部高等学校外国語専攻教学指導委員会日本語組　2000 『高等院校日語専業基礎階段教学大綱』大連理工大学出版社.
中国教育部高等学校外国語専攻教学指導委員会日本語組　2001 『高等院校日語専業高年級階段教学大綱』大連理工大学出版社.
山田陽子　2011 「中国の高等教育機関における日本語教育と学習者の一側面—遼寧省の大学を事例に」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』15, 71-82頁.

Conducting Japanese Conversation Lessons in the International Context：HyperMirror-Based Japan-China Intercollegiate Practice

LI Zhe, SUN Zhi, OKUBAYASHI Taiichiro,
NAKAMURA Masako, MAESAKO Takanori

This paper reports on a study in which the HyperMirror-mediated learning environment was constructed. The tool was developed in collaboration with native Japanese speakers from a university in Japan, for non-native Japanese learners (in this case, native Chinese students in China) to support international distance communication in Japanese conversation lessons. The efficacy of the HyperMirror-mediated learning environment was tested by means of trial lessons. Prior to a trial lesson, the non-native Japanese learners were required to draw a relation diagram of Japanese honorific expressions with the aid of the Japanese language learning assisting system. In the HyperMirror-mediated learning environment, learners then presented their drawings and conducted a dialogue with the help of native Japanese speakers. The aim was to engage the learners in conscious use of Japanese honorific expressions in active communication with native Japanese speakers. The results of this study show that the HyperMirror-mediated learning environment, in which the common-virtual scene enables students situated in Japan and China to feel like they are in the same place, increased learning motivation among the learners of Japanese. It is suggested that the drawing of the relation diagram and the collaborative dialogue improved the non-native speakers' understanding of Japanese honorific expressions. This research also sheds light on issues in simplifying system operation, timing conversation exercises, and setting dialogue difficulty.